ロマーン・ヤーコブソン
ROMAN JAKOBSON

一般言語学

ESSAIS DE LINGUISTIQUE GÉNÉRALE

川本茂雄監修
田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳

みすず書房

R. ヤーコブソン

川本茂雄　監修

一般言語学

田村すゞ子　村崎恭子
長嶋善郎　八幡屋直子　共訳

みすず書房

ロマーン・ヤーコブソン

一般言語学

川本茂雄
田村すゞ子
村崎恭子
長嶋善郎
八幡屋直子
共訳

1973年3月15日　第1刷発行
1976年1月20日　第2刷発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 814-0131（営業）815-9181（本社）振替 東京195132
本文印刷所 精興社
扉・カバー印刷所 栗田印刷
製本所 鈴木製本所

© 1973 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan
書籍コード 3010-19702-8005
落丁・乱丁本はお取替えいたします

まえがき

ロマーン・ヤーコブソン略伝　1896 年 10 月 11 日モスクワに出生　モスクワ大学ラサレフ東洋語学院卒業　1915 年モスクワ言語学集団を創設　1920 年チェコスロヴァキアに移る　ブルノのマサリック大学においてロシア語学などを講じた．1926 年プラーグ言語学集団の創設に参加し，トゥルベツコイを援けて活躍する　ナチのチェコスロヴァキア侵入により，難をスカンディナヴィアに避け，2 年間コペンハーゲン，オスロー，ウプサラにおいて教鞭をとり，1941 年アメリカ合衆国へ移る．1942 年－1946 年ニューヨークの Ecole Libre des Hautes Etudes にあり，その間にレヴィ＝ストロースと相知る　次いでコロンビア大学に聘せられ，1950 年にはハーバード大学スラブ語・文学ならびに一般言語学教授となり，1957 年マサチューセッツ工科大学教授を兼任する．1968 年両大学において名誉教授となる．

ヨーロッパにおいて逸早く，音韻論の発展と確立に指導的役割を演じたプラーク学派の驍将として令名をはせ，後アメリカに移ってからもその地の言語学界の一方の重鎮として独自な存在となり活躍を続けたロマーン・ヤーコブソン Roman Jakobson は，今やハーバード大学，マサチューセッツ工科大学名誉教授として功成り名遂けて，ボストン市に隣接する学府ケンブリッジ市スコット通り 6 番地の閑静な広々とした邸宅に，美しく才長けたクルィストゥィナ Krystyna 夫人と悠々と余生を送っておられる　「悠々と」といったが，そのことは学界からの隠棲を意味するのではなく，研究心はますます旺盛で，年ごとに新論文が発表され，大冊 7 巻と予定される「ロマーン・ヤーコブソン選集」Selected Writings of Roman Jakobson (The Hague. Mouton, 1962–　　)

の刊行を続け，請われてアメリカの諸大学はもちろん，しばしばヨーロッパを訪れて識見を開陳しておられる．1972 年春，フランスの最高学苑コレージュ・ド・フランスでの講演においては聴衆は堂に溢れ，《Ne poussez pas!》の叫びが挙げられ，文字通り押すな押すなの盛況であったと伝えられる．言語学という高度に技術的な学問を専門とする学者の講筵にこのような光景が生ずることにはやや意外の観なきにしもあらずであるが，ヤーコブソンの知的世界の広大多彩であることを思えば，また人類学者クロード・レヴィ＝ストロース，心理学者ジャック・ラカン，その他の錚々たる人物を通じてのフランスの学界・思想界に及んだヤーコブソンの影響に鑑みれば，あえて怪しむに足りない　その前の年，同じフランスにおいて，文芸の理論・分析を課題とする雑誌《Poétique》が，その1号を「ロマーン・ヤーコブソン頌」に捧げた．文学誌がこのように敬意を表したことはまた，ヤーコブソンが本来の言語学という限られた分野に跼蹐することなく，言語を中心に据えながらもその視野を四方に及ぼし，人間性のさまざまな局面に光を照射する，その学風から結果したひとつの現われであろう．《Linguista sum linguistici nihil mihi alienum puto》「われは言語学者なり，こと言語に関するものにしてわれに無縁のものなしとす」は，ヤーコブソンの愛唱することばであると見受けられる

数年前，フランスの構造主義がわが国の思想界に衝撃を与えたことは，なにひとの記憶にもまた新しいところである　おびたたしい紹介の文が書かれ，いくつもの書冊が相次いで上梓されたが，その慌しい時期も今や一過して，構造主義の基本的な文献の翻訳が整備されはじめ，本格的な咀嚼の段階に達した観がある．この間，構造主義の原点として言語学に言及されることがしばしばであったが，フェルディナン・ド・ソシュールの名とともに，ロマーン・ヤーコブソンのそれが繰り返されることが多かった．構造主義が思想界で大きく採り上げられるようになった契機としては，レヴィ＝ストロースの存在が重きをなしたことは今さら繰り返すまでもない．この卓越した人類学者をして構造言語学に開眼せしめたのはロマーン・ヤーコブソンであることも，世人のよく知るところであろう．第二次世界大戦中ヨーロッパの戦火をアメリカに逃かれ，二人はたまたまニューヨークで相知ることになった．以後両者のあいだには学問的な交流が生じ，論文を協力執筆したこともあり，また友人としての温い交わりが続けられることになった（本訳書の第五部をなす第 XII 章は，レヴィ＝ス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

トロースに捧げられている）

学問的見地からいうならば，これら二大知性の遭遇において，いっそう強烈な影響を受けたのはレヴィ＝ストロースのほうであった．そのことはレヴィ＝ストロースが「構造人類学」Anthropologie structurale の第1部，特に第2章の冒頭に明言しているところから明らかである．ヤーコブソンの同僚，プラーグ学派の巨匠ニコライ・トゥルベツコイのことばを引用して，レヴィ＝ストロースは構造言語学はもろもろの社会科学に対して，核物理がもろもろの物質科学に対して演じたのと同じ革新を必ずや演ずるであろうと宣している．そして「体系」，「関係」，「一般法則」，あるいは「弁別特性」，「対立項」などの音韻論の術語・観念が採り上げられ，同じような研究法がいかにして（必要な変更を加えた上で）人類学の領域で適用されるかを論じている．

こうして社会科学の先導役の位置に立つようになった言語学，構造言語学は，音韻論の分野でまず最初に堅実な基礎を樹立していたのであった　この創設の事業に功績のあったのは，マテジウスを会長に戴き，ヤーコブソンとトゥルベツコイを副会長に擁したプラーク言語学集団 Cercle Linguistique de Prague であった．この集団の機関紙 TCLP(＝Travaux du Cercle Linguistique de Prague) に，ヤーコブソンは幾篇もの重要な論文を発表した　そこには史的音韻論の記念されるべき論考があり，また音素の二項対立の理論の最初の素描が登場した．その上に構造主義的思考は，すでに文法の扱いにも及ぼされ，動詞や格の体系が論ぜられた　トゥルベツコイの「音韻論の原理」Grundzuge der Phonologie が 1949 年フランス語訳された際には，この大著が共時的研究であることを補う意味において，ヤーコブソンの論文「史的音韻論の原理」も仏訳されて，これに附せられた．また，「二項対立」の観念は後にさらに展開されて，本訳書の第 VI 章をなすものとなった（その他に，特に 1952 年初版の G Fant, M Halle との共著 Preliminaries to Speech Analysis, The MIT Press, 1962[4]. 邦訳：竹林滋，藤村靖訳「音声分析序説」研究社，1965 年，を参照）

こうして構造言語学はヤーコブソンをその重要な一経路として他の科学に，ひいては思想界に影響を及ぼすことになるが，ヤーコブソン自身の活動自体も早くから言語学から隣接領域へと拡がっていった　例えば 1935 年に，論文 "Randbemerkungen zur Prosa des Dichters Pasternak" においてロシアの詩人パステルナークの散文を論じた際に，隠喩 metaphor と換喩 metonymy につ

いて考察したものが，やがて失語症の研究と結びつき，本訳書の第 II 章を成す論文へと発展し，1939年小児の音素獲得を論じ，その世界の諸言語の音韻体系との関係を考察した "Le développement phonologique du langage enfantin et les cohérences correspondantes dans les langues du monde" は，本訳書の第 VI 章の終結部の基礎となった．ちなみに云えば，本訳書に収めた論考はすべて 1949 年以降に発表されたものであり，換言すればヤーコブソンがアメリカに移って以後の論文であって，それらはヨーロッパにおいてすでに胚胎ないしは発芽したものの見事な開花をなすものである．なお，本訳書の最後を飾る第 XII 章は，Main Trends in the Social and Human Sciences, I, Mouton/Unesco, 1970, の草稿によったもので，本書中執筆年代のもっとも新しいものであり，同時にヤーコブソンが言語学と隣接諸科学との関係を綜観した一大展望図である．

ヤーコブソンの言語芸術への関心は深く，かつ古い．その著作目録を披いてみると，最初の本格的な論文というべきものは，1921 年の "Novejšaja russkaja poèzija" である．それは近代ロシア詩を論じたものであり，特に詩人フレブニコフの作品の研究である．ヤーコブソンは若い頃，マヤコフスキーやフレブニコフとの友好があり，フォルマリストと接触していたのであった．ヤーコブソンの文学——詩的機能における言語——への関心は，その後もずっと絶えることがなく，特に最近では詩学の領域での論作が多くなっているように見受けられる．（その一例としては，『月刊・言語』1972 年 6 月号に訳載の「ウィリアム・ブレークなど詩人＝画家の言語芸術について」を参照されたい．）本訳書の第 XI 章において，ヤーコブソンがなぜ詩学を言語研究の重要な一部と見做しているかが明らかにされている

こうして詩学の場合はもちろん，失語症の研究であれ，小児言語の考察であれ，はたまた通信理論への関心であれ，そのいずれもヤーコブソンにとっては言語学者の余技ではさらさらない．否，言語学という特殊な，しかも精密な学問を土台にして，その知見を人間研究の諸部門へ押し拡げて，言語学者によってはじめて提起され，回答され得る問題を随所において採り上げているのである．そこに，まさしく，人間学に心を寄せる広範囲にわたる人士から，ヤーコブソンの業績が注目される所以があるのであろう．本書の訳出がわが国の言語学を志す若い学徒に役立つであろうことは，はじめから言うまでもないところ

であって，言語学を専門とする人士以外の広い読者層の披見を得られれば幸いである．

ヤーコブソンの論文・著書は数・量ともに厖大であり，また他方生涯にわたって独創的な著述に専心してきたヤーコブソンには，その学説を簡易に望見せしめるような啓蒙的著書がない．そうした状況でヤーコブソンの学風の大綱に接し得るような一書を選集することがいかに困難であろうかは，「ヤーコブソン著作目録」Roman Jakobson· A Bibliography of his Writings (The Hague: Mouton, 1971) を一瞥するならば頷けよう．幸いヤーコブソンを敬慕するフランスの若い言語学者ニコラ・リュウェ Nicolas Ruwet によって刊行された好箇の選集がある．題して "Essais de linguistique générale" (Paris Les Editions de Minuit, 1963) という．1968 年東京言語研究所の招きによって，ヤーコブソン教授が来日された折，博士自身がこの選集を基準に本訳書を計画することを慫慂され，その上これに加えるようにと，当時草稿のままで携えておられた本書第 XII 章の写しを与えられた．（リュウェ氏の選集はさらにイタリー語訳: Luigi Heilmann, Saggi di linguistica generale, Milano Feltrinelli, 1966 としても刊行され，別にスペイン語訳も目下進行中である由である．）こうして，東京言語研究所の服部四郎博士からの御推輓もあって，わたくしが翻訳全般の責に当たり，同研究所の新進の方々に訳筆を執っていたたくことになった 実際の仕事の分担は，次のように行なわれた．田村すゝ子· I，II，V 村崎恭子: VI，VII，XII の II．長嶋善郎: IV，VIII，IX，X．八幡屋直子· III，XI，XII の I．一応出来上がった原稿はわたくしの手許へ送られ，訳文の点検と訳語の統一が行なわれた 最終の段階では田村，村崎両氏に，さらに後には長嶋氏にも，拙宅に集っていたたき，協力して訳文の修訂に多くの時間を費した．同時に村崎氏の手によって索引が用意され，フランス語版・イタリー語版よりもいっそう使いよいものになった．しかし，このような努力にもかかわらず，原著書の博大な知識の盛られた論文を余すところなく精確に日本語に移植することには，われわれの力の及ひがたかったところが少くないことを虞れる．到らぬ点については，博雅の士の御教示を乞う次第である．

なお，翻訳の仕事を実際に進めるに当っては，リュウェの選集に基いて英語の原文——それも能うかぎり最初に発表されたもの——を捜めて，これを基準とし，その後の新版・新刷などを時に参考とした．第 VI 章においては，そこ

に明記したように，原著者の要望によって本文中に異本のテキストを採用した箇処がある．

1973年1月

川 本 茂 雄

脚注に関する注記——脚注のうち：1) 2) 3)‥ は原文の注，†印はニコラ・リュウェの仏訳で加えられた注，＊印は本訳書の訳者がつけた注である

本書に訳載した論文の原題と掲載雑誌等は，次の通りである

I "Results of the Conference of Anthropologists and Linguists", *Supplement to International Journal of American Linguistics*, Vol 19, No 2, April 1953, *Mem* 8 (1953)

II "Two Aspects of Language and Two Types of Aphasic Disturbances", *in* R Jakobson and M Halle, *Foundamentals of Language* (The Hague, 1956)

III "Typological Studies and their Contribution to Comparative Linguistics", *Proceedings of the VIIth International Congress of Linguists* (Oslo, 1958)

IV "On Linguistic Aspects of Translation", R A Brower (ed), *On Translation* (Harvard University Press, 1959).

V "Linguistics and Communication Theory", *Proceedings of Symposia in Applied Mathematics* Vol XII (= *Structure of Language and its Mathematical Aspects*, American Mathematical Society, 1961)

VI. "Phonology and Phonetics" 〔with M Halle〕 *in* R Jakobson and M Halle, *Foundamentals of Language* (The Hague, 1956)

VII "Tenseness and Laxness" 〔with M Halle〕 *in* R Jakobson, C G M Fant and M Halle, *Preliminaries to Speech Analysis* (M I T Press, 1963); および in *In Honour of Daniel Jones* (London, 1964)

VIII "The Phonemic and Grammatical Aspects of Language in their Interrelations", *Actes du VIe Congrès International des Linguistes* (Paris, 1949).

IX *Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb*, Russian Language Project, Department of Slavic Languages and Literatures, Harvard University, 1957.

X "Boas' View of Grammatical Meaning", *The Anthropology of Franz Boas: Essays on the Centennial of His Birth* (=*American Anthropologist*, LXI, 5, Part 2; Memoir 89, 1959)

XI "Closing Statement. Linguistics and Poetics", T A Sebeok (ed), *Style in Language* (New York, 1960)

XII "Linguistics and Adjacent Sciences" 本論文は1967年8月ブカレストで開催された第10回国際言語学者会議の Plenary Session で発表されたもの．

以上の論文のうち，III, VI, VII は R Jakobson, *Selected Writings* I (The Hague, 1962) に，I, II, IV, V, VIII, IX, X, XII は R Jakobson, *Selected Writings* II (The Hague, 1971) にそれぞれ再録されている．

目　　次

まえがき……iii

第一部　一般問題

I　人類学者・言語学者会議の成果……3
II　言語の二つの面と失語症の二つのタイプ……21
III　類型学とその比較言語学への貢献……45
IV　翻訳の言語学的側面について……56
V　言語学と通信理論……65

第二部　音韻論

VI　音韻論と音声学……79
VII　張りと弛み……125

第三部　文法

VIII　言語の音素的相と文法的相との相互関係……135
IX　転換子と動詞範疇とロシア語動詞……149
X　文法的意味についてのボーアズの見解……171

第四部　詩学

XI　言語学と詩学……183

第五部　言語学と隣接諸科学

XII　言語学と隣接諸科学 ……225

事項索引
原語索引
人名索引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部

一般問題

I

人類学者・言語学者会議の成果

——言語学者の立場から——†

この会議は，あらゆる点で非常によかったと思う．が，ただ一つだけありがたくないことがある．それは私がこの会議における言語学上の成果を総括して話さなければならないことである．第一に言えることは，この会議は非常な成功を収めたということであろう．ところで，私は通信理論というものを勉強していて，それによると，陳述が情報をもつのは，二者択一の状況がある場合に限られるということである．しかし会議の結びのことばを述べる者にとっては，二者択一という状況は存在しない．会議が不成功だったということばが彼の口から出るようなことは，決してあり得ないのである．

さて，この会議の言語学上の成果すべてを，見たままに話したいと思う．もちろんそこに私なりの解釈がはいる．翻訳機械は内容を理解しないため，文字どおり直訳してしまうということを，バー＝ヒレル Bar-Hillel が見事に示したが[1]，私はそういう翻訳機械にはならないつもりである．ひとたび解釈がはい

† これは 1952 年，インディアナ大学で開催された人類学者・言語学者会議の結語である．そのときのテープ録音を筆記したものが，"Results of the Conference of Anthropologists and Linguists" と題して，*Supplement to International Journal of American Linguistics*, Vol. 19, No. 2, April 1953, *Mem.* 8 (1953) に掲載された．その第一章 "From the point of view of anthropology" は，クロード・レヴィ＝ストロース Claude Levi-Strauss によるもので，第二章 "From the point of view of linguistics" が，ヤーコブソンによるこの文である．第三章は，ヴォーグリン C. F. Voegelin とシービオク Th. A. Sebeok が書いた，発表および討論の要旨である．

1) Yehoshua Bar-Hillel, "Some linguistic problems connected with machine

ると，相補性の原理が出て来て，観察の道具と観察されるものとの間の相互作用か進んでしまう．しかし私はできるだけ客観的に話すように努めるつもりである．

この会議の成果のうちて私か最も重要と考えるものは何であろうか．何がいちばん印象的たったたろうか．第一に皆の心が一つだったということである．つまりここにいる私たちは皆違った音を出したが，しかし皆が一つの音素のいろいろな異音のようなものであったと言えよう．

言うまでもなく，この会議の最大の特徴は，あらゆる種類の孤立主義をきっぱりと一掃したということである．孤立主義は，政治においても憎むべきものだが，それとまったく同様に，科学においても嫌悪すべきものである．しかしこの会議では，言語学対人類学とか，西洋の言語学対東洋の言語学とか，形の分析対意味論とか，記述言語学対歴史言語学とか，メカニズム対メンタリズム等々といったようなスローガンは一つもなかった．これは専門化の必要かないとか，限定された問題に焦点を合わせて研究していく必要かないとかいう意味ではない．たたこういったようなことは，実際に研究を進めていく際の異なった方法にすぎないのであって，根本的な考え方そのものの違いではない，ということである．要素要素を切り離してしまうことはできず，たた区別することかできるだけだということは，この会議て実に見事に示されたとおりである．言語分析の過程で各要素を別々に分けて扱う場合には，そのような分離は人為的なものだということを，いつも念頭においていなければいけない．言語を論ずるとき，音素のレベルと無関係に形態のレベルを論ずることもできるし，意味のレベルと無関係に形のレベルを論ずることもできる．しかしそのようなやり方はちょうと音響滬波のようなもので，高い周波数か，あるいは逆に低い周波数を除外してしまうこともあるわけてある．しかし，これは単に科学実験の一つの方法にすぎないのである．ほかの例をあげると，「目かくし鬼」の遊びを見物するのは非常におもしろいものである．目かくしをした鬼はどのような動作をするたろうか．同様に意味を知らない場合，言語について何か言えようか　さらに，袋競争（両足を一つの袋に入れて走る競争）のときのように，自由に動きがとれない人か走るのを見るのもよい参考になる．か，袋をはいたほうが

---

translation", *Philos. Sci*, 20 (1953), pp 217～225 参照.

袋をはかないよりも走りやすいと言う人はいないだろう．つまり，われわれの究極の目標は，言語をすべてのレベルを含んだ複雑なものとして観察することであるということが，ますます明らかになってきたのである．テレンティウス Terentius（ローマの劇作家，185－159 B C）の言葉をもじって言えば，“われは言語学者なり．こと言語に関するものにしてわれに無縁のものなしとす．Linguista sum linguistici nihil a me alienum puto” というわけである．

さて，言語を人類学者といっしょに研究するなら，人類学者たちの助けは何よりありがたく，かつよい刺激になるものである．言語があれば文化があり，文化があれば言語があるということ，言語は社会の生活の重要な部分と考えられねばならず，言語学は文化人類学と密接なつながりをもっているということを，人類学者たちは繰り返し述べ，証明している．レヴィ＝ストロース Lévi-Strauss によって実に明解に示された[2] この関係を，いまここで論ずる必要はないたろう．しかし私は，午後の討議のときにビドニー Bidney が言ったことに賛成である．つまり言語という「種」を包含する，もっと近い「属」がある，ということである　言語は記号の一つの下位クラスで，この下位クラスは東西両洋の思想の粋を集めて象徴的に具現している人物，趙元任 Yu Ren Chao か，象徴 symbol という名称で実にうまく記述しているものである　したがって言語を明確にするには，スミス Smith が言ったように，ほかの象徴の体系を観察して比較してみなければならない．たとえば身振りの体系だか，これは早くはクレンョフ Kuleshov，クリノチリー Critchley が取り組み，現在はバードホイステル Birdwhistell か研究している．[3] これが言語とずいぶんよく似ているということには同感だが，もう一つつけ加えるならば，似ていると同じくらいずいぶん大きく違ってもいる．いろいろの記号体系を分析し，比較するという仕事をしていく場合，言語学は記号の科学の一部分であるというソンュール Saussure のスローガン[4] たけでなく，彼に比べて少しも劣らぬ同時代の人で，構造的言語分析の最も偉大な開拓者の一人，チャールズ・サンダーズ・パース Charles Sanders Peirce の生涯の仕事も，忘れてはならない．[5] パースは，

2) *Anthropologie Structurale*, ch IV 参照

3) H L. Smith, Jr, “An outline of metalinguistic analysis”, *Georgetown University monograph series on linguistics and language teaching*, 2 (1952), pp 59～66 および Birdwhistell, *Introduction to Kinesics* (Washington, 1952) 参照

4) Saussure, *Cours de Linguistique Générale*, p 33 参照

記号学の必要を説いただけでなく，さらにその基本線まで描いた．象徴，特に言語象徴 linguistic symbol を論ずる際の彼の基本的な考え方や仕方は，注意して学べば，言語をほかの記号体系と関連づけて研究するための重要な支えとなるはずである．そうすれば言語記号の特質を識別することができる．さて，いろいろな記号体系は，たがいに対等なものではなく，基本的な，第一義的な，最も重要な記号体系は言語であるということを，われわれの友人マッコーン McQuown が言ったが，まったくそのとおりだと思う．言語は実に文化の基礎である．言語と比べると，ほかの象徴の体系は，付随的な，あるいは二次的なものである．言語こそ，情報伝達の最も主たる方法である．

言語の実際の運用の研究には，言語学は二つの関連分野，すなわち通信の数学的理論と情報理論との，すばらしい成果に大きく助けられてきた．通信工学は，この会議のプログラムにはなかったけれども，シャノン Shannon やウィーヴァー Weaver，ウィーナー Wiener やファノ Fano，あるいは，すぐれたロンドン・グループの著作の影響を受けていない発表はほとんどなかった．皆，無意識のうちに，符号化 encoding とか，復号化 decoding とか，あるいは冗長度（余剰度）redundancy ……のような，彼らの術語を使っていた．この通信工学と言語学との関係は，正確にはどうなのであろうか．この二つの学問の間に，何か合わないところでもあるだろうか．いや，全然ない．実際，構造言語学と通信工学者たちの研究とは，目的が一致している．それならば，通信理論を言語学に用い，またその逆をするということは，実はどういうことなのであろうか．確かにある点では，情報の交換については工学者のほうが正確にはっきりと系統立てているし，技術的にもしっかりしている．また量的に表わすという点でも，有望な可能性を見せていると認めざるを得ない．一方，言語学者は，言語およびその構造に関するぼう大な経験によって，工学者が言語資料を扱う際の矛盾や失敗を見つけることができる．言語学者と人類学者との協力のほかに，言語学者が，そしておそらく人類学者も同じだろうと思うが，通信工学者と絶えず協力していくということが，極めて有益なことだと思うのである．

言語伝達に関与する基本的な要因を分析してみよう．発言事象はすべてメッ

5) C. S. Peirce, *Collected Papers*, 8 vol. (Harvard Univ. Press, 1960).

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com